

2005. 3月

年度末になり、職員室の様子を見ながら思ったことがある。我々が発する言葉で一番多いのは、多分「忙しい。」ではないだろうか。始業1時間前から出勤し、教室で子どもたちの登校を迎え、勤務終了後1～2時間の仕事をして帰る知人は多い。子どもと一緒にいる時間には、決められた休憩時間や休憩時間はあっても、「ただ今休憩中」と子どもから離れることはできにくい。また、帰宅して学級だよりを書いたり次の日の授業の準備をしたりすることも、ほとんど教師は経験している。早く帰りたいが、帰られない現実があるのは確かである。幸いにも、私の周りには、子どもを第一義に考え、子どもたちのための努力を惜しまない教師が多い。私的な時間と公的な時間の境界が分かりにくいのも、教師生活の特徴かもしれない。

しかし、このような生活を当たり前としていいのか、疑問を感じる。子どもの下校時刻が高校生よりも遅く、冬は帰路が暗くなる生活時程を見直すべきだ。また、多種多様な会議のために、子ども一人ひとりとゆっくり話もできない放課後のあり方も見直すべきだ。明日の授業づくりに使えないような放課後も問題である。子どもも教師も、もう一度、学校教育界にしかない「放課後」の意義を考え直すことが重要と考える。子どもと接する時間を直接勤務とすれば、放課後は間接勤務と言えそうである。この間接勤務の放課後をきちんと確保するとともにもっと増やしたい。間接勤務の時間こそ、今日子どもたちを振り返り、明日子どもに返す方途をゆっくり考える時間となるからである。

我が校の生活時程もいろいろ問題もある。内実で考えなければ、子どもを追い立てることにもなる。子どもの側に立って生活時程を見直し、「帰りの会」終了後、職員会のある曜日は除いて、高学年で1時間の放課後を確保した代案を提案する。直接勤務で子どもたちをしっかりと見取り、間接勤務で明日の方途や授業を考えること。今教師に必要なのは、明日の子どもを考えるゆとりではないだろうか。自分たちを苦しめているのは、実は自分たちであることに早く気が付くべきだ。

(芝)

放課後

その日の授業の終わったあと。(大辞林)
学校でその日の授業が終わったあと。(大辞泉)



放課後、群れて遊ぶ高学年